

ジャック・デュプイによる諸宗教対話の 基本的な方向性について

阿 部 仲麻呂

Jacques Dupuis' An Opinion of the Interreligious Dialogue

Nakamaro ABE

In this paper, I interpret Jacques Dupuis' last Writing of "*Christianity and the Religions, From Confrontation to Dialogue*". He was a theologian of an original dialogue stance. We see Dupuis' thinking of the Interreligious Dialogue; thinking perspective, thinking process, and thinking good point.

要 旨

本稿では、現代のキリスト教における「諸宗教の神学」分野の大成者ジャック・デュプイ（1923-2004年）の最終的な著書『キリスト教と諸宗教——対決から対話へ』（Jacques Dupuis, *Christianity and the Religions, From Confrontation to Dialogue*, Orbis Books, Maryknoll, New York, 2001.）の内容を紹介する。著作の概要や成立経緯を明らかにするとともに、デュプイの思索の特長をも解説する。こうして、デュプイが独自の対話理解を備えた研究者であることが理解できるようになる。

1. 「対話」を基調とする諸宗教の神学

「諸宗教の神学」分野の大家であり、ローマ教皇庁立グレゴリアン大学教授かつ『グレゴリアヌム』誌編集長だったジャック・デュプイ（1923-2004年）の最終的な著書『キリスト教と諸宗教——対決から対話へ』（Jacques Dupuis, *Christianity and the Religions, From Confrontation to Dialogue*, Orbis Books, Maryknoll, New York, 2001.）の内容を一瞥するか

ぎり、彼が「対話」を重んじる研究者であることが明らかとなる。「諸宗教の神学は『対話的な神学』でなければならない」（註1）という一文が彼の人生の最後の総決算としての著書『キリスト教と諸宗教』のなかに含まれていることから、デュプイによる「諸宗教の神学」の基本的な方向性は「対話」に裏打ちされていることが見て取れる。つまり、彼の神学の基調は「対話」なのである。

ジャック・デュプイ著『キリスト教と諸宗教』の原稿は2000年3月31日に完成され、2001年に公刊された（未邦訳）。この書評では、そこに至るまでの経緯をたどりつつ、本書の意義を明らかにしてゆきたい。

2. 『キリスト教と諸宗教』出版の経緯

デュプイによる「諸宗教の神学」に関する著作は、三部作である。彼は、1989年に『世界の諸宗教と出会うイエス・キリスト』（*Jesus Christ of the Encounter of World Religions*）という学術論文集を公刊したが、この著書が「諸宗教の神学」についての第一番目の作品であった。その著作では、ヒンズー教側の研究者たちがナザレのイエスを歴史的な人物として理解している様子を伝えている。そのうえで、キリスト教的な立場にもとづく「諸宗教の神学」を構築するために適したモデルとして「神主導的なキリスト中心主義」（Theocentric Christcentrism）を提唱した。

それから8年後の1997年に出版社からの要請を受けたデュプイは、「諸宗教の神学」についての総括的な序説の執筆に取り組んだ成果を公にすべく努力した。その著書では、まず、最初に、他宗教に対して教会がいてきた過去数世紀にわたる公式見解がいかなるものであるのかを精査するとともに、キリスト教神学者たちが実際に提出した見解や神学的評価をも総合的に吟味した。そのうえで、キリスト教と世界の諸宗教との真摯な出会いにおいて提起されることとなった神学的な課題の核心について、歴史的順序にもとづいて簡潔かつ明確な説明を試みた。この二番目の著書『宗教的多元主義にもとづくキリスト教神学の構築に向けて』（*Toward a Christian Theology of Religious Pluralism*）では、「三位一体的かつ霊的なキリスト論」（Trinitarian and Pneumatic Christology）と称する「諸宗教の神学」の新たなモデルが提案されるに至った。この新たなモデルを提示できたおかげで、デュプイはキリスト教信仰の核心を保つことができた。

つまり、全人類にとって「いかにしても除外することのできないほどに本質的な普遍的救世主」としてのイエス・キリストへの信仰を堅持することができた。しかも、そればかりではなく、神による全人類のための唯一の救いの計画においてほかの宗教の信奉者が各々の宗教のなかに肯定的な意義と救いの価値を見出すことを肯定することも可能となった。その第二番目の著書によって提示された考察は大勢の読者から、おおむね好意的に受け容れられた。しかし、イタリア語やフランス語や英語の各神学雑誌の書評において、複数の神学者たちからは、いくらかの批判的な問題提起がなされた。これらの問いかけに対して、デュブイは三篇の小論文を公にすることによって、彼らの様々な批判の全体を網羅しながら丁寧に応えた。

1997年に第二冊目の作品が出版された後に、デュブイは編集者から同様のテーマで新たにもう一冊の本を書くように要請され、三冊目となる『キリスト教と諸宗教』を完成させた。編集者は第二番目の本を一般人向けに概説することを目指していた。しかし、デュブイは本書を、単に二番目の本を手短かに整理したかのようなダイジェスト版にすることを望まなかった。そこで別の手法を用いて完成させることを考えた。本書の目次を一瞥するとその相違は一目瞭然である。いくつかの章はまったく新しくなっているし、改編した章もある。全体としては、主題に直接関係のない神学論争は削除し、脚註も必要最低限に留めている。

こうして、「諸宗教の神学」の専門家ではなくとも、本書を読む者は差し迫った問いかけを投げかけられることになる。それは、以下のとおりである。キリスト教と他宗教との関わりについて考える際に、人類の救いの計画において他宗教の存在意義とはいったい何か。もっと卑近な言い方をすれば、ある一つの宗教団体に所属することによって、それがその人にどのような変容をもたらすのだろうか。——なぜ、この私は、キリスト者なのか。自分が生まれついた家庭が、たまたまキリスト教を奉じていたからなのか。そして、イエスの「道」に従って生きる自分が存在しているという事実を、いったいどのように受け留めればよいのだろうか。そのことを、神の前におけるある種の特権として誇らしく思えばよいのか、それとも重い責任として理解すればよいのか。つまり、恩恵としてか、あるいは責務としてか。もしくは、その両方としてか。そのうえで、日々、道端や職場で出くわす相手に対して、いったいどのような姿勢で出会えばよいのか。

今、私たちは新たな状況にさらされた世界のなかで暮らしている。すなわち、多国籍社会、多文化社会、多宗教社会に住んでいる。何世紀もの間、キリスト教は他宗教の人々に対して否定的な態度をとってきた。そして、他宗教の伝統に対して偏見をいだいていた。このような姿勢は、今日、もはや、通用するものではない。過去の歴史を振り返ってみれば、キリスト者が神および人々に対してゆるしを請うべきことが厳然として求められていることが明白となるであろう。それでは他宗教に対して今日、私たちのとるべき態度と神学的評価は、いったいどのようなものとしてあるべきであろうか。

3. 全人類に対する神の計画を理解するための司牧的な案内書の概観

『キリスト教と諸宗教』の性質は、文献学にもとづいた概念分析を目的とする学問を遂行するというよりは、むしろキリスト者が諸宗教の動向に対して関わる際の方向性を紹介した司牧的なものである。つまり、本書は決して抽象的な議論を目指すものではなく、むしろ価値観の多様化する社会のまっただなかで如何に対処すべきか、という具体的な問題意識に支えられている。現代のキリスト者が、全人類に対する神の計画をいっそう詳しく知るとともに、その計画というものが、私たちの予想をはるかに超えるほどに美しく、味わい深いものであることを発見してゆくための信仰生活の案内書として本書は価値を持つ。

それでは、以下に本書の内容を紹介しておこう。その際に、「序論」と「あとがき」に関しては省くことにする。「序論」は本論の構成を要約して先に示しているだけであるし、「あとがき」は本論の復習的な整理となっているのであるから、本論の概要を理解すれば事足りるからである。

3.1. 『キリスト教と諸宗教』第一章

第一章「イエス、使徒的教会、諸宗教」では、新約聖書に焦点を当てており、その探究は二つの項目によって成り立つ。第一章の第一項「イエスと諸宗教」では、歴史上のイエス・キリストがイスラエル民族以外の「異邦人たち」に対して、いかなる立場で対峙したのか、また異邦人たちの宗教的思想および実践について、どのように考えていたのかを研究する。つまり、イエスの態度は、果たして否定的で断罪的なものであったのか、あ

るいは開かれた共感に支えられたものであったのか、を問うている。

つづいて第一章の第二項「使徒的教会と諸宗教」では、歴史上のイエスから論じ始めて、次第に新約聖書をもとにした使徒的教会の考察へと視点を移し、第一項と同様の問いかけを考察してゆく。ここで取り扱う内容が目指す地点は、教会共同体が「他者」に対して具体的にどのような態度をとっていたのかということと、諸宗教に対する理論的な評価が肯定的なものか否定的なものか、開かれたものか、排他的に閉じられたものか、などを眺めることである。

さらに、初期キリスト教共同体が、諸宗教との対話を進展させたのかどうか、換言すれば、宣教の広がりという摂理的出来事を通して、他宗教に対する偏狭な態度が開かれた状態に向かって移行したという点を探る。

3.2. 『キリスト教と諸宗教』第二章

第二章「岐路に立つ第二ヴァティカン公会議」は、本書の基本方針の典拠を示す内容となっている。とくに、二世紀の教父たちによって提示された「みことばの種子」や「神による契約」という発想が積極的に評価されている。しかし「救いの箱舟」という教会観は、評価されていない。なぜならば、この発想は5世紀に至って「教会外に救いなし」と言う文言にまとめられることとなり、時代を経るに従って偏狭な解釈として敷衍され、キリスト者以外の立場には存在価値がないという排他主義に陥ったからである。結果的に、偏狭な教会主義的排他論が影をひそめたときに神学者たちがそれに代わる理論を見つけ出そうとして「福音に取って代わるような事がら」という発想が提唱された。つまり、イエス・キリストにおける救いを説明する際に、神学者たちは「含蓄的信仰」という術語を用いることで、たとえ明確に信仰を表明することがない人でも、この「含蓄的信仰」を備えることができるので、救いの可能性をもつ、という結論に至った。

こうして、この第二章の中心課題は、現代に身を置きつつ、カトリック教会における諸宗教の神学の最初の典型的な展望をまとめ、その展望が20世紀の第二ヴァティカン公会議において再発見されたことを示すことに存する。そして、諸宗教の神学が、どのようにして第二ヴァティカン公会議の流れに沿って進展したのか、さらに公会議の中で描かれた諸宗教の神学の正確な意味をあぶりだし、そのような表現の趣旨は何であったのか

を明らかにする。そればかりではなく、限界をかかえつつも、諸宗教に対して開かれた姿勢をとりつつ真実を見究めようとする教会の最近の公文書の内容を、デュブイは評価している。

このようにして、デュブイの考察は、諸宗教に関して十全な理解を成し得るに至った現代へとたどり着く。まさに、諸宗教の神学とは、キリスト教以外の宗教が備えている救いの価値をあらゆる角度から検討することに他ならない。そして、諸宗教の神学とは、人類の救いの計画において諸宗教が積極的な意義を担っているかどうか、さらに、諸宗教とキリスト教の関係には積極的な意義があるかどうかを見究めてゆくことでもある。

イエスにおいて示された「道」と並んで、西欧社会においてさえ人びとは救いへと導く複数の「他の道」に出会うという事実を、もはや否定することはできない。そして、救いへと至る「他の道」の存在を許容するに際して、伝統的な立場に固執する人がいると同時に、諸宗教の神学あるいは斬新な宗教的多元主義にもとづく新たな神学が拮抗していることは、もはや驚くにはあたらない。

3.3. 『キリスト教と諸宗教』第三章

第三章「最近の神学におけるキリスト教と諸宗教」で、デュブイは「宗教的多元主義」が多義的な意味内容を備えていることを丁寧に紹介している。その際に、それぞれの用法の特徴を明らかにすることで、意味内容の差異を把握することが欠かせない。各用法の意義を理解することによって、キリスト教信仰とは両立し得ない不適当な紛らわしい理論——「多元主義者」として知られる神学者による多元主義パラダイム——の弊害をこうむらずに済む。こうして、キリスト教信仰の核心を堅持し、人類に対する神の計画において世界の諸宗教を積極的に評価する方向性を見出そうとする神学的努力が実るための地盤が整う。

以上、見てきたような第一章から第三章という、時代の流れに適確に適応しようとする「肯定的な神学」の後に、「総合の神学」(synthetic theology)として総括することのできる内容を備えたいいくつかの章が続く。その際、デュブイは、従来のような「組織神学」および「教義神学」という術語を、あえて用いることなく「総合の神学」という術語を採用する。

デュブイは神学を遂行するうえで、「教義的」な方法だけでは不充分であることを指摘している。さらに、神の秘義および人類に対する神の計画の秘義が、神学的な「体系化」を超えた地点に存することを示している。なぜならば、それぞれの段階、あるいは各々の状況において、この秘義に関する知識と理論は、常に限界を持ち、部分的理解に留まり、仮の一時的理解にしかたどり着けないからである。こうして、今日の諸宗の教神学において提起されている第一に優先されるべき緊急な神学的諸問題は、常に総合的神学という発想のもとでこそ考慮されるべきものであることがわかる。こうした考え方を真剣に提起し、開かれた姿勢を目指すときに、諸宗教に関するキリスト教神学と宗教的多元主義の立場の相互協調の基礎が築かれることになり、さらには有益な宗教間対話につながる歩みを披き出すことができるようになる。

3.4. 『キリスト教と諸宗教』第四章

第四章「契約の神と諸宗教」であつかわれる最初の主題は、「救いの歴史」あるいは「歴史における救い」の広がりを示すことにある。「契約の神と諸宗教」と言う表題のもとに、ヘブライ的伝統とイエス・キリストにおいて啓示された神は、「異邦人」あるいは「他者」とも救いの契約を結んだのかどうか、そしてこの人々もまた「神の民」あるいは「契約の神の民」と呼ばれる可能性があり、そう呼ばれるべきなのかを問う。さらに一步進めて、神とその民の直接的な関係性が今日においても継続されているのかどうか、この「宇宙的」な契約は現在でも効力を持ち得るのかどうか、またこの契約の主導性は常に神の普遍的救済意志あるいは神による分け隔てのない愛のもとにあるのかどうかを問う。

救いの歴史において「他者」が一定の場を占めることができるのか、「他者」は生ける神との契約の絆を備えているのかどうか、という問いかけと並んで、「この終わりの時代に……独り子を通して」（ヘブライ 1・1-2）御自身を現わす以前に、人類の歴史を通して御自身を現わし、啓示する神による「数多くの様々な道」についての問いかけの意義も描かれる。

ヘブライ人への手紙の著者が、ヘブライ的伝統において預言者を通して語られる神の啓示にのみ言及していることについては、もはや疑問を差し挟む余地はない。にもかかわらず、聖書のこの箇所によって開かれた展望

を、人類の歴史全体にまで広げることが果たして可能かどうか、という問いが生じてくる。もし、すべての人が聖なる契約の歴史および救いの歴史のなかに含まれているとすれば、端緒としては不完全でしかなかったとしても、何らかの方法で、神は、啓示のことばや救いのわざを通して、御自身を彼らの歴史のうちに現わしたと結論づけられるはずである。

3.5. 『キリスト教と諸宗教』第五章

第五章で、デュプイは「多様で豊かな方法によって」と言う主題のもとに、第四章で提示されていた問いかけに対する積極的な回答を試みている。つまり、他宗教伝統において、それぞれの伝統において書かれた聖なる書物に託された記憶のなかに、そしてそれらの宗教的実践の生きた記憶そのものに目を向けることで、敬われるべき神の救いのことばとわざ、すなわち「神が持つ多様な相貌」の痕跡をたどることになる。

神御自身の人類に対する自己顕現の頂点を体現しているのがイエス・キリストである。人となった神のみことばであるイエス・キリストにおいて、神は決定的な言葉を人類に対して語られ、人類と世界の救いの秘義はイエス・キリストにおいて体現された。イエス・キリストにおける神の啓示は、無比無類であり、聖なる啓示の歴史において、いかなる者の追従をも許さないほどに卓越した独自性を備える。すなわち、それは、神から生まれた神の独り子としての、人となった人間イエスの位格的な独自性による。

まさしく、普遍的な救いの価値は、同様にイエスの人間としての生涯によるものであり、特にイエスの死と復活の過越秘義によるものである。しかし、このことによって、イエスの人間としての意識が神の秘義のすべてを尽くしているとはいえない。その結果、イエス・キリストにおいて示された神の啓示は、神の秘義をすべて内包していると言うことは不可能であるだろう。またイエスの生涯、死と復活が、神のみことばの救いの力の唯一にして、真の表現であるとはいえない可能性も出てくる。

3.6. 『キリスト教と諸宗教』第六章

第六章は、「神のみことば、イエス・キリスト、世界の諸宗教」という題のもとに、神のみことばがいかなる意味において、イエスの人間性と「一体化」しつつも、今や復活し栄光化されたイエスの人間性を超えて、救い

のために働くことが出来るのかを明確に説明する。この章では、人類の救いの唯一の計画において、神のみことばによって照らされた救いのわざと、歴史的なイエス・キリストの出来事において神によって実現された救いの秘義という、二つのあいだの密接な関連性を強調している。こうして、開かれた諸宗教の神学にとって、みことば自身が備える救いのわざの意義が確認されている。

3.7. 『キリスト教と諸宗教』第七章

第七章の主題である『『唯一の仲介者』と『複数の参与的仲介』』は、第六章の内容を引き継いでいる。新約聖書の啓示として明らかにされている、神と人との間のイエスの「仲介」(1 テモテ 2・5) は、他宗教において働く「複数の参与的仲介」を決して排除するものではない。換言すれば、イエス・キリストにおいて実現された救いの秘義は、異なる複数の仲介を通して、様々な方法によって人類にもたらされる。この様々な方法は、救いの秘義の秘跡的顕現の様々な異なったしるしである。

しかし、この参与的仲介は、もちろん教会内での仲介——もちろん教会において働く仲介もまたイエス・キリストの「仲介」に参加しているものなのだが——と同一の次元に置くことは決して出来ない。むしろ、キリストの出来事にこそ土台をおき、頭であり主であるキリストを信じる教会は、より完成された形でのイエス・キリストの救いの秘義の秘跡的な顕現となっている。

ところが、これが唯一の可能な仲介の方法なのではない。たとえそれが不完全な形であろうとも、救いの秘義の真の仲介は、他宗教においても働いており、それぞれの宗教のメンバーにとっての救いの「道」または「通路」となる。いかなる場合にも、人間の救いの秩序のなかにあって、他宗教に関する救いの働きは、イエス・キリストの出来事において頂点に達する、人類への神の計画の総体のなかに位置づけられる。

3.8. 『キリスト教と諸宗教』第八章

第八章では「教会、神の国、諸宗教」の三者の関係を詳しく検討する。ここでの目的は、イエスによって告げられた神の国が、教会よりももっと許容量の大きなものであることを明らかにすることである。

神は御自分の神の国を、イエスの生涯、言葉、行為の内に、決定的にはイエスの死と復活の過ぎ越しの秘義において打ち立てられた。歴史のなかに現存する神の国は、教会と同一のものとして定義することは出来ない。神の国とは、世界のなかに、歴史のなかに現存し、働き続ける救いの秘義を現すものなのである。そのことは歴史的現実であり、諸宗教伝統のなかに生きるメンバーも、キリスト者のそばにあって、十分な資格を持って、分かち合うことが出来るものである。したがって教会は神の国そのものではなく、教会は神の支配の「秘跡」なのである。つまり、教会は神の国のしるしであり、その証人である。教会は、世界内に現存する神の国の働きを、つまり歴史のなかに現存する神の国の働きを「良きおとずれ」として全人類に告知知らせる役目を担っている。

こうして、この章では、全人類、すなわち、キリスト者と諸宗教の「他者」がともに神の国を分かち合うという事実が、諸宗教の神学にとっていかに重要な意味を備えるのかを示している。このような考察は、諸宗教間対話のための神学的な基盤として、特別な意義をもつ。

3.9. 『キリスト教と諸宗教』第九章

第九章は「多元的社会における宗教間対話」という主題である。いかなる宗教的伝統を信条としていようとも、全人類は神の国の一員である。そして、終末的完成に向けて、歴史の中で神の国が拡大されてゆくようにと人類が招かれてから、キリスト者と「他者」とは存在しているということにおいて、もはや深く関わってしまっていることが明白である。

神の目から眺めれば、宗教的な信条の相違などは瑣末なことにしかすぎない。私たちが相互に歩み寄ろうと望むよりも、はるか以前から、すでに実際には協力関係が実現してしまっているからである。諸宗教間対話へ向けて努力することは、キリスト者および諸宗教の伝統を信じる人びとのあいだに横たわる相違を乗り越え、いっそう強く、深い一致を創り出す。つまり、真に人間的で聖なる世界を実現するために協働し、努力を分かち合ことが、それぞれの宗教に豊かさをもたらす対話の実践に他ならない。

3.10. 『キリスト教と諸宗教』第十章

第十章「諸宗教者の祈祷」は、第九章と連続した内容となっている。宗

教間対話という状況のもとで、キリスト者と他宗教のメンバーとが互いに祈りを実践しつつ分かち合うことは可能であるかどうかを問う。それゆえ、第十章は、「宗教相互間の祈り」と題されている。まず、最初に、諸宗教対話の際になされる祈りの分かち合いの基本原則となる神学的な基盤がどのようなものなのかを考察する。つまり、いかなる宗教的伝統が祈りの分かち合いに関わり得るのかを明らかにする。そして、さらに考察を進めて、一神教もしくは他宗教の根底にいかなる宗教的伝統が含まれるのかを明らかにすることに意を用いながら、統合された祈りの実践にはいかなる明確な土台が必要となるのかを問う。さらに、宗教間相互の祈りを実践に移すためのいくつかの具体的提案を行っている。

3.11. 『キリスト教と諸宗教』 結論

「結論」では、デュブイの独創的な見解が三つ提示されている。彼が目指していた独自の宗教的多元主義の立場は従来の相対的な多元主義とは根本的に異なっている。その独自性を三つの角度から述べたのが『キリスト教と諸宗教』の結論部である。以下に概略を記そう。

(1) 確固とした土台に根差した宗教的多元主義 (Religious Pluralism in Principle)

デュブイは、キリストによる唯一絶対の救いのかげがえのなさという「確固とした土台に根差した宗教的多元主義」を唱えた。その説は「多元的な包括主義」あるいは「包括的な多元主義」と呼ばれている(註2)。関連箇所を引用しておこう。——「誤解を避けるために、ここでの提案と、『多元主義の立場を採る神学者によって仮定される多元主義的なパラダイム』とを明確に区別しなければならない。『多元主義者』によって推進されて発展した『多元主義へのパラダイム転換』は、従来の『包括主義』を乗り越えるものであった。『多元主義』の場合は、伝統的にキリスト教信仰の立場によって宣言されているイエス・キリスト自身と彼の出来事における普遍的な救いの意義を予め拒否することを基盤としている。イエス・キリストは『多元主義者』によって、究極の秘義へと導く『複数の道』のなかの一つとして、他宗教伝統が主張する多くの救済者のなかの一人の救済者にまで格下げされる。『あらゆる道』は基本的に同等であり、人類にとっては『単一で唯一の道』は必要ではなくなる。唯一の道が人類の普遍的な救い主としてのイエス・キリストに帰されることは、『多

元主義』の立場にとっては、あり得ないのである。/これとは対照的に、ここで支持される神学上の挑戦は、弁証法的な緊張があるにもかかわらず、全人類の普遍的で本質的な救い主としてのイエス・キリスト自身がもつ唯一の意義に関するキリスト教信仰の中心的な主張と、他宗教伝統によって提起される救いの複数の道という両方の価値を、全人類のために意図されている神のひとつの計画のなかに同時に保ちつづけ、結びつけてゆくことへの長大なる旅なのである。ここで主張されるのが、「確固とした土台に根差した宗教的多元主義」なのである。そして、それは、『多元主義者による中立で公平な多元主義』に向かうパラダイム転換とは何の関係もないのである。イエス・キリストは実に人類の本質的な救い主であり、キリストの出来事は、全類の救いの源である。しかし、このことは全人類に対する神の計画のなかにあって、諸宗教の伝統がその信奉者のために、イエス・キリストの秘義の『仲介』として奉仕していることを妨げるものではないのである」(註3)。

従来の「宗教的多元主義」の立場だと、特定の信仰の立場を破壊してしまい、専ら相対主義に陥る危険性が常につきまとう。どの宗教も同等とされてしまう視点が「宗教的多元主義」なので、その立場を堅持する場合はキリスト教の立場の独自性が見失われる。そこで、デュプイは「確固とした土台に根差した」という形容詞をつけることで、従来の「宗教的多元主義」を新たな立場として組み替えようとした。この発想はデュプイ独自の神学的な表現であり、新たなパラダイムの提示となっている。

(2) 不釣り合いな相互補完 (Mutual Asymmetrical Complementarity)

デュプイは諸宗教の存在価値を認めつつもイエス・キリストによる救いの唯一絶対性をも強調する。——「しかしながら、神の真理と恩恵の源としてのキリスト教伝統と他宗教伝統のあいだの相互補完性は『不均衡』なものであることも付け加えておかなければならない。これは、他宗教伝統のなかにある真理と恩恵の独自性の保持と自律的な価値が、イエス・キリスト自身とその働きにおける名状しがたい神の啓示と自己交流の超越性の意義を決してかき消すことはないという意味である」(註4)。

キリスト教と諸宗教とは相互に補完し合うことで支え合うが、決して対等な関係性ではない。むしろ、不均衡な関係性にこだわるべきであると、キリスト教的な立場の神学者としてのデュプイは考えている。

「不釣り合いな相互補完」(Mutual Asymmetrical Complementarity)——この言い回しもデュプイ独自の発想にもとづいている。つまり、キリスト

教の立場と他の宗教の立場とが相互補完する際に、キリスト教の立場の優位性を確保するための新たな立場を強調している。もしも、キリスト教と他の宗教の立場を同等であると見なせば、相対主義に陥ることになり、キリスト教の独自性を確保することができない。しかし、「不釣り合いな」という形容詞を付けることで、キリスト教の立場の優位性を確保することができるようになる。

(3) 質的跳躍 (A Qualitative Leap)

最終的なデュブイの到達点は、「質的跳躍」という発想において極まる。その発想においては、人間の側からの視点よりも、まず神の側からの視点に信頼することが重視されており、その姿勢は、まさに賭けである。キリスト者は、人間的な次元にしがみつ়くことなく、信仰の次元へと跳躍しなければならない。関連する箇所を引用しておこう。——「教会史におけるすべての公会議と同様、第二バチカン公会議は決定的で最終的な言葉を残さなかった。むしろ、それは出発点となる最初の呼びかけなのであり、この最初の呼びかけは、人間に対する神の計画が常に私たちの理解をはるかに超えたところに留まってはいるが、より幅広い理解に到達するために歩みつづけるための方向性を示している。／この文脈において、本書の目的は、諸宗教に関するキリスト教神学およびカトリック神学が、諸宗教に対する、より肯定的で神学的な評価と諸宗教の信奉者に対するより開かれた具体的な立場へと『質的跳躍』を遂げるための考察をもたらせるように、いくつかの指針を提案することであった。ここで推進される提案は、意図的に教会の信仰の枠内において組み立てられ、そしてそれが神学的な議論に余地を残すということは言うまでもないことである。ここで、もう一度言うが、この『質的跳躍』は神学的な多元主義に向けての『パラダイム転換』とはまったく何らの関係もない。／この『質的跳躍』こそが、今日の多文化社会、多宗教世界においてキリストのメッセージがその信憑性を保つために必要となる。今後も、さらによいものとして熟考された考察こそが信頼に足るものとして現代世界のより広い地平へのメッセージとして、広く行き渡ってゆくのだろう。ここで避けなければならないことは、地平を制限しつつ狭くすることによって、望ましくない結果を生む『信仰上の防御姿勢』を頑なに完遂しようとすることである。まさに、より開かれたアプローチと、より肯定的な態度が、神学的にしっかりと構築されるならば、私たちはキリスト教のメッセージのなかに驚嘆すべき新しい広さと深さを発見すると筆者は確信しているのである」(註5)。

「質的跳躍」(A Qualitative Leap)——この言い回しもまた、デュブイ独自の発想にもとづく。キリスト教信仰の立場が、諸宗教の立場と質的に異なる独自性を備えているという視点を確保するために、デュブイは「質的跳躍」という発想を提示している。なぜならば、活ける神のほうからの語りかけ（啓示）の視点を出発点とするキリスト教信仰の立場にとって、人間的視点とは異質の次元が備わっているからである。

こうして、「確固とした土台に根差した宗教的多元主義」・「不釣り合いな相互補完」・「質的跳躍」という三つの独特な発想を眺めてみるときに、『キリスト教と諸宗教』の「結論」において、デュブイが教皇庁教理省の問いかけに対して断固として闘うそぶりを強調しながらも賢明に対処しようとすることが浮き彫りとなる。

4. 教皇庁教理省の査問を経たデュブイの心境

デュブイは1998年から2000年に至るまでの約三年間、教皇庁教理省からの査問を受けた。しかし、その査問はデュブイによる諸宗教の神学の第二の著作『宗教的多元主義にもとづくキリスト教神学の構築に向けて』(*Toward a Christian Theology of Religious Pluralism*, Maryknoll NY, Orbis Books, 1997.) に関してのものであった。その苦悩の日々を経て、最終的にまとめあげたのが、諸宗教の神学に関する第三の著作『キリスト教と諸宗教』であった。デュブイの『キリスト教と諸宗教』の原稿そのものは2000年3月31日に完成した。

その後で、先の査問を反映した公的な報告書として、教皇庁教理省から二つの公式文書が刊行された。まず第一の文書は、2000年9月5日に教理省から発布された宣言『主イエス』(*Dominus Iesus*)である。この公式文書の正式な表題は、『イエスキリストの唯一性および救いの普遍性と教会についての宣言、主イエス』である。この文書は、ヴァティカン出版局(Libreria Editrice Vaticana)から小冊子の形をとって、いくつかの異なる言語で出版された。その公式ラテン語版は、2000年10月7日に発行された『使徒座官報』(AAS; *Acta Apostolicae Sedis* 92, 2000/10)の742頁から765頁にかけて公表されているとおりである。次に第二の文書は、デュブイの著書『宗教多元主義にもとづくキリスト教神学の構築に向けて』についての「通告」である。この「通告」の正式な表題は、「ジャック・デュ

ブイによる著書『宗教多元主義にもとづくキリスト教神学の構築に向けて』についての通告」(Notification on the Book “Toward a Christian Theology of Religious Pluralism by Jacques Dupuis”)である。この通告は、最初、『オッセルバトーレ・ロマーノ』紙 (*L'Osservatore Romano*) の2001年2月27日号にイタリア語で載せられた。この通告の公式テキストは、『宗教多元主義にもとづくキリスト教神学の構築に向けて』のなかに「教義上、重要ないくつかの点について、著しく不明瞭で難しく、読者を誤った害のある意見に導きかねない」(前書き)ものがあると指摘した。そして、この様な害になる可能性のある不明瞭さは取り払わなければならない、と述べている。

この二つの公式文書は、ともに、先に出版されていたデュブイの著書『宗教多元主義にもとづくキリスト教神学の構築に向けて』および本書で展開されているいくつかの主題に密接に関わっている。第一の「宣言」では、神とカトリック信仰またはカトリック教義のいずれにも見出される問題点について、長大な記述が書き連ねられており、教義的な原則を打ち立てている。つまり、信仰上の立場または教会の教えに矛盾すると考えられる神学者の教義理解と見解についての反論を繰り返す。第二の「通告」では、その註解において明確に述べられているように、デュブイ師の著書の評価をするにあたり、『主イエス』で表明された原則を典拠として引用している。この二つの文書は連携しており、共通してデュブイの学説を批判している。つまり、扱っている主題は同一であり、主題も酷似している。神への信仰の同じ要素が主張され、カトリック教義の同じ点が強調されており、誤謬への反論がなされている。第二の書としての「通告」では、教義の広範囲な展開箇所は全て省略されており、短い文書になってはいるものの、「宣言」と同じ方法に従い同じ素材が継承されている。つまり合計八つの提案が示される。そのうちの六つは、信仰またはカトリック教義の内容について述べ、第二段階においては、この信仰に対してまたはカトリック教義に対して誤りであると考えられるデュブイの見解について論駁する。

しかしながら、デュブイの『キリスト教と諸宗教』のなかで二つの公式文書の内容が踏まえられることなく無視されている、と結論づけるのは早急である。それゆえ、二つの公式文書が事実上、デュブイの新著のなかでどのように活かされているのかを理解しておく必要がある。まず、1997

年9月に第一版が出版された『宗教的多元主義にもとづくキリスト教神学の構築に向けて』が、1998年の6月初旬に教皇庁教理省による調査の対象になった、と言うことを考慮に入れなければならない。約三年の間続いたこの調査において、デュプイは絶えず教理省による質問に応え続けなければならなかった。それが、いかに耐え難い重荷であったとしても、この長い苦闘の過程を通して、デュプイはいくつかの見解を修正し、概念を明瞭にし、思考表現の曖昧さを避け、いくつかの重要な問題について、よりじっくりと考える機会が与えられたのである。この長い間に書かれた三つのかなり長い論文(このうちの二つはイタリア語と英語で出版されている)は何度も再考し、何度も書き直すこの長く続いた過程を証している。この三つの論文は、教理省によって公式に表明されたものに対してではなく(聖省に対しては書面をもって公に言及されたものはない)様々な言語によって出版された本の紹介や研究のなかで、神学者によって提起された問いに応えたものであったが、この三つの論文の中身は教理省に対しても、問題を提起した神学者たちにも、両方に対する答えを含んでいることは明らかである。神学者も教理省もしばしば同じ問題を提起し、同じような疑問と懸念を抱くのは当然であろう。それゆえ神学者に明瞭に答えることによって、この論文は明らかに教理省をも念頭に入れて書かれている。『宗教的多元主義にもとづくキリスト教神学の構築に向けて』に含まれている思想の再考と訂正の長く続いた過程は、これらの質問に言及しながら、三年間にわたって続いていたのである。

本書は前書と比較すると、長く続いた議論の光のなかで思索を明瞭に出来たこと、前書のなかで全くないわけではなかった曖昧ないくつかの点を避けることができたこと、キリスト教啓示と伝統のなかでのいくつかの確証に関する基盤を強力にすることが出来たこと、いくつかの教義が神学的基盤において欠如していたと思われるものへと一層の説明を提供できたこと、などの利点を持つ。

それでは、『キリスト教と諸宗教』は、教理省から発布された二つの公式文書の内容と如何なる関係があるのだろうか。神とカトリック信仰の教義を確固として宣言する二つの文書の内容を、制限なしに受け容れるのはカトリックの立場の神学者ならば当然のことである。この内容に関して異なる背景においては、異なる主張が可能であるとしても、カトリックの

立場の神学者が信仰の内容に関しては教皇庁の指針と意見を異にするということはある得ない。しかしながら、信仰がひとつであるにもかかわらず、信仰へのアプローチの異なる視点とそれが表現される異なる背景ゆえに、信仰の違った理解の仕方が成り立つこともまた可能である。

教理省の二つの公式文書は、聖書、公会議文書、教会公文書宣言などの抜粋をもとにした教義的見地から信仰を理解し、説明しようとする。このアプローチの仕方は確かに合法的であるが、必ずしも排他的な固執の態度に陥る必要はない。自由なる裁量をもって、『キリスト教と諸宗教』では「三位一体の神、とりわけ聖霊を中心に据えたキリスト論」と呼ばれる視点を発展させるべくデュブイが試みているからである。この展望は、一方で御父との関係を、もう一方で聖霊との関係を強調するという利点を持っている。この関係は、イエス・キリストの秘義に本来備わっている固有の特質である。歴史全体を通して神が人類と出会うのは、同時にこの三位一体的なはたらきにおいてであり、そうして最終的にはキリスト論的なものとして現われてくる。このアプローチはまた、事実としての宗教的多元主義に関する、具体的な現実への明確な言及を宣言しながら、なおかつ帰納法と演繹法を連結させてゆくことにつながる。これを背景にした神学の任務は、現代世界を特徴づけている宗教的多元主義が、人類に対する神の一つの救いの計画のなかで肯定的な意義を持っているのかどうか、すなわち、人類の普遍的な救い主であるイエス・キリストに対するキリスト教の信仰が、諸宗教の信奉者の救いの秘義において、他宗教伝統の肯定的な役割の確証と相容れるものかどうかを問うことにある。

本書で主張されているいずれの立場も、二つの文書で表明された主張に適っていないのか、あるいは、これらの主張を異なる仕方で説明するものではないのか、を見究める必要がある。しかし、その説明の多様性を明確にするために、教義を表明するために異なる方法があることを正当化すると思われるいくつかの理由を示すための一つの努力が本書ではなされ、それによって前書が与えた誤解を解き、解釈上の間違いを糾している。多様性が信仰の内容における相違を意味するのではなく、同じ信仰が異なる状況のなかでは異なる理解の仕方や表現につながることを『キリスト教と諸宗教』が表明していることは言うまでもない。このような多様性は、キリストの啓示と教会の教義的権威に対する建設的な忠誠の精神においてこそ

提案され得る。

こうした新たな地平が教会の生きた伝統に深く根ざし、その上にこそ構築され得ることを決して忘れてはならない。デュブイが「質的飛躍」と呼んだ、この提案が、今日でさえ教会の權威の公式の教えのなかに新しい地平を切り開くように努めることが私たちには肝要となる。デュブイは教会の公式の教えが、硬直した固定的な境界を定めることなく、神学的な探究が境界を越えて飛躍することを禁ずるはずがない、という確信を持っている。教会の教えが、神への信仰が何であるのかを權威に基づいて決定し、歴史全体を通して人類に段階的に開示され、キリストにおいて「十全に啓示された」言い尽くしがたい神の秘義に関して神学者が思索し熟考する指針を描き、それに沿って神学を展開出来るようにすることが、デュブイの思索の方向性であった。この方向性は、デュブイによって「包括的多元主義」と呼ばれているものである。その方向性は、「多元主義神学者」による多元主義的なパラダイムとはいかなる共通点も持たない。それはキリスト教信仰と教義とが、普遍的な救い主として、イエス・キリストの唯一性への信仰の確信と、人類への神の計画のなかで諸宗教伝統の持つ肯定的な役割と意義の神学的な理解を、いかに結びつけてゆくかを示すことに主眼をもつ。キリスト者が他宗教の伝統と出合い、対話を遂行してゆくにあたって、キリスト教の独自性を誠実に保つべきことは、あまりにも当然のことである。もしも、一人ひとりがいだけ宗教的確信に中身がなく、不安定さが伴うのならば、対話そのものが成立しないからである。

しかしキリスト教の独自性への誠意ある確信は、人類に対する神の永遠の計画のなかで、神御自身によって他宗教に託されたいかなる肯定的な意義も先験的に拒否されるという排他的な宣言に組する必要はない。神の自己開示または救いの手段の独占的な所有を主張するキリストとキリスト教についての絶対的で排他的な宣言は、キリスト教のメッセージとキリスト教のイメージを歪めるとともに、矛盾を引き起こすからである。私たちにとって、かけがえのない神（唯一の神）は「三位一体の神」に他ならない。神の内的ないのちを特徴づける、この三位格間の独自の方法での交流は、御父と御子と聖霊とが啓示および救いにおいて、人類と出会うための一貫した計画のうちで働いている。宗教の複数性は、従って、愛と交流である一つの神のなかにその決定的な源を見出す。

教会共同体が、他者に対して心無い排他的評価を暗にほめかすようなキリスト教信仰の立場を表明することを慎むためにも、教会自身がその本来の願望を心に保ちながら、教会自身のいのちの再創造を主張し、救いの対話において神の慈しみにもとづくアプローチを実践し、成熟してゆくものとなることを、デュブイは信じて疑わず、深く確信している。もはや、護教的な姿勢は逆効果を生み出すことにもつながる。言わば「偏狭な相貌」を持つ信仰を現わすことにもなりかねない。デュブイは今日、もはや充分であると思われる以上に、より一層開かれた探究方法および姿勢が神学的に裏づけられるならば、キリスト教信仰の信憑性は、一層高まり、キリスト者自身がキリスト教信仰のメッセージの根底に、斬新な広さと深さとを発見することにつながると確信している。

5. デュブイによる「諸宗教の神学」の特長

このところ、諸宗教の神学という分野においてあつかわれる研究テーマのほとんどが、まさしく宗教的多元主義に啓発されつつ、その影響下で展開されるようになってきているという実情がある。このことを、キリスト教神学の立場にもとづいて言えば、単に宗教の多元的な現状を論じるだけではなく、むしろ確固とした土台にもとづいて宗教的多元主義を語ることが許され得るのかどうか、何よりも問われている。あるいは、全人類に対する神の計画において現代世界の特徴としての諸宗教の多様性が果たして積極的な意義を備えているかどうか、が問われている。こうした問いかけが孕んでいる特別な意味を慎重に吟味してゆかなければならないだろう。すなわち、多元主義を主張する神学者たちの「多元主義者としてのものの見方(パラダイム)」にやみくもに迎合したりしてはならない。そして、いつのまにか忍び寄ってくる彼らの学説に呑み込まれることで、信仰を失ってはならない。かといって、確固とした理念を標榜することのいささかもないような「相対主義」に堕してしまってもならない。むしろ、ここでの問いかけは、神の永遠の相のもとで、つまり神によって今もこの歴史において継続している、全人類に対する唯一の救いの計画のなかで、世界の諸宗教の多様性は、神御自身の目から見ると、私たちが未だ発見していないような隠された積極的意味を備えてはいるかもしれない、という洞察と結びついている。

デュブイが本書を執筆することで何よりも強調したことは、人類の歴史のなかで、人間が神を探し求めるよりも前に、まず先に神が人間に対して働きかけたという焦点である。イエス・キリストについて何の知識も有していない人びとの場合、たとえ彼らが自覚していなくとも、「聖霊が、救いの過越の秘義（復活秘義）において……あらゆる人が愛される者とされる可能性を与えた」という「神だけが知っている方法」（『現代世界憲章』第22項を参照のこと）が、まさに歴史的には「複数の道」に他ならないのであり、その道によって人びとは神を探し求めることになる。しかし、そのようにできるようになるのは、実は、神が最初に彼らを探し求めていたことによるのである。これこそが神の道なのではないだろうか。聖書のメッセージの根底に「あらゆる人に向けられた神の賜物」としての世界の諸宗教の価値を見出すのならば、そのような多様な宗教的諸伝統が、人類に対する神の計画において積極的な意味を備えているということを暗に示していることがわかる。こうして、「確固とした基盤にもとづく宗教的多元主義」には、ゆるぎない根拠が備わっている、と言える。

6. デュブイの「対話」理解

本稿の冒頭部で、デュブイの「対話的な諸宗教の神学」に関して言及したが、ここで、最後に、長文になるが、デュブイの「対話」理解を掲げておこう。

「まず初めに、対話における誠実さを口実にして、対話それ自体を通して結果的に信仰の真理を再発見するという期待と引き換えに、自己の信仰を一時的にせよ判断停止状態に追い込んでしまってはならない。逆に、対話における正直さと誠実さとは、さまざまなパートナーが、自己の信仰の忠実さのなかで対話に入り、その対話に全身全霊を賭けることを特に要求する。いかなる不信感も、いかなる心理的な遠慮の余地もない。そうでなければ、宗教同士もしくは信仰の立場同士の対話について語ることはなくなる。結局、真の宗教生活の基本には信仰があり、それが宗教生活に固有な特質と独自性を与えている。この宗教的な信仰は、個人的で私的な生活のなかにあっても、宗教同士の対話にあっても、譲れないものである。この信仰は分割したり交換したりできる便利な品物なのではない。むしろ、信仰とは、人間が軽い気持ちで処理できないような、神から受ける賜

物なのである。同様の理由で、対話における誠実さは、信仰を一時的にでも判断中止状態に陥らせてしまうことをゆるさないように、信仰への忠実さもまた信仰について妥協したり縮小したりすることをゆるさない、真正な対話は、このような方便を許容しない。真正な対話は共通の土台を求めて、それぞれの内容を減らすことによって、異なる宗教伝統のあいだにある対立する要素や矛盾を乗り越えようと試みる『諸説の混淆主義』(syncretism)を認めないし、また、異なる宗教のあいだで共通する分母を探し求めて、各宗教のなかにある要素を選び出し、それらを結び合わせ、形もなく意味もない混合物を作り出す「折衷主義」(eclecticism)をも認めない。対話が真実であるためには、安易な方法に流されないことが賢明である。安易な方法は、いずれにせよ幻想でしかない。むしろ、諸宗教の信仰のあいだにある、いかなる矛盾をも隠そうとすることなく、矛盾に満ちている現状を認め、忍耐と責任とをもってこの矛盾と正面から対決しなければならない。相違や矛盾を隠すことは、ごまかしを増やすだけであり、そのことによって対話からその目的を奪うことになる。結局、対話は、自分自身の確信よりも他者の確信に対する誠実な評価をもって、相違のなかにおいて理解することを目指す動きである。真の対話は、このように両者を、それぞれ相手が備えている信仰に対する確信が自分にとって何を意味しているのかを、自分自身に問いかけるように導いてゆく」(註6)。

デュプイは自分の信念を設定しない浮遊的な相対主義を断固として斥ける。相手に対して決して妥協しない。自分の信念を曲げず、かといって相手の信念をも曲げようとしない。お互いが自分の立場を守りつつも、そのままで真正面から相手に向き合って関わるべきことが、デュプイによって強調されている。自分が信じている事柄を保ちつつも、相手の全存在をありのままに受容するだけの包容力を備えるときに、私たちは真正なる「対話」を遂行し得るのである。

■註

- (註1) Jacques Dupuis, S.J., (trans., Phillip Berryman), *Christianity and the Religions: From Confrontation to Dialogue*, Orbis Books, Maryknoll, NY and Darton, Longman and Todd Ltd, London, 2002, pp.234.

- (註2) Dupuis, *op.cit.*p.255.

- (註 3) Dupuis, *op.cit.*p.253.
 (註 4) Dupuis, *op.cit.*p.257.
 (註 5) Dupuis, *op.cit.*p.259.
 (註 6) Dupuis, *op.cit.*228-229.

■主要参考文献

一次資料；

1. Jacques Dupuis, S.J., *Il cristianesimo e le religioni: Dallo scontro all'incontro*, Edizioni Queriniana, Brescia, 2001.
2. Jacques Dupuis, S.J., (Traduction, Olindo Parachini), *La Rencontre du christianisme et des religions; De l'affrontement au dialogue*, Éditiones du Cerf, Paris, 2002.
3. Jacques Dupuis, S.J., (trans., Phillip Berryman), *Christianity and the Religions: From Confrontation to Dialogue*, Orbis Books, Maryknoll, NY and Darton, Longman and Todd Ltd, London, 2002.

二次資料；

1. 阿部仲麻呂「主イエスへの祈り——距離と共生」(『信仰の美学』春風社, 2005 年, 451-468 頁).
2. 阿部仲麻呂「カトリック教会における『諸宗教対話』と『諸宗教の神学』の概要」(日本カトリック司教協議会諸宗教部門編『諸宗教対話——公文書資料と解説』カトリック中央協議会, 2006 年, 146-165 頁).
3. 阿部仲麻呂「書評 ジャック・デュブイ著『キリスト教と諸宗教』」(『カトリック研究』第 86 号, 上智大学神学会, 2017 年, 136-153 頁所載).
4. William R. Burrows(ed.), *Jacques Dupuis Faces The Inquisition, Two Essays by Jacques Dupuis on Dominus Iesus and The Roman Investigation of His Work*, Pickwick Publications, Oregon, 2012.
5. Jacques Dupuis, S.J., The Christological Debate in the Context of Religious Plurality, in: *Current Dialogue* 19 (1991) 18-24. 邦訳; ジャック・デュブイ (岩本潤一訳)「キリスト論と諸宗教における救いの神学」(『神学ダイジェスト』第 74 号 [93 年度夏季] 上智大学神学会, 1993 年, 50-61 頁所載).
6. Andreas Erhard Graßmann, *Jacque Dupuis' religionstheologischer Entwurf in "Unterwegs zu einer christlichen Theologie des religiösen Pluralismus"*, Grin

- Verlag, Germany, 2011.
7. Veli-Matti Kärkkäinen, *An Introduction to the Theology of Religion; Biblical, Historical & Contemporary Perspective*, Inter Varsity Press, Illinois, 2003, pp.205-215.
 8. 教皇庁教理省 [和田幹男訳] 『主イエス——イエス・キリストと教会の救いの唯一性および普遍性』 カトリック中央協議会, 2006 年.
 9. Alexander Löffler, *Religioustheologie auf dem Prüfstand, Jacques Dupuis im Dialog mit dem Zen-Meister Thich Nhat Hanh und dem Dalai Lama*, Echter Verlag, Würzburg, 2010.
 10. 増田祐志「書評 ジャック・デュブイ著『宗教的多元主義のキリスト教神学にむけて』」(『カトリック研究』第 68 号, 上智大学神学会, 1999 年, 195-202 頁所載).
 11. Lancy Monteiro, Christ of interreligious context and the crux-issues of Christian faith, *Gregorianum* 98/4, Pontificia Universitas Gregoriana, Roma (2017), pp.705-724.
 12. Gerald O'Collins, S.J., Jacques Dupuis's Contributions to Interreligious Dialogue, in: *Theological Studies* 64 (2003), pp.388-397.
 13. Gerald O'Connell, *Do not Stifle the Spirit, Conversations with Jacques Dupuis*, Orbis Books, New York, 2017.
 14. Alan Race, *Christians and Religious Pluralism, Patterns in the Christian Theology of Religions*, SCM Press, London, 1983.
 15. 高柳俊一「第四章 『諸宗教の神学』の形成と展開——カール・ラーナーを中心にして」(『カール・ラーナー研究』南窓社, 1993 年, 120-145 頁).

